

第二言語が母語に与える影響—断り発話の分析から—

山田恵美子

放送大学新潟学習センター

要旨

中間言語語用論研究の大半は、母語と第二言語 (L2) の間の影響の方向は母語から L2 であるとしてきたが、近年、L2 も母語に影響を与えるとする研究もある。語用論レベルで L2 が母語に影響を与えるというには、母語と文化的に大きく異なる言語の学習者を対象とした調査が必要である。本稿は、英語に接触する頻度の異なる日本人大学生の 2 グループを対象に、母語での断りの発話行為に英語の影響が見られるかどうかを探る。調査はポライトネス理論の枠組みでデザインした。

英語に接触する頻度の低いグループとは異なり、接触する頻度の高いグループには、このグループが日々接触しているアメリカ人と同様、距離を「疎」と捉えた相手に直接断り表現を、「親」と捉えた相手に間接断り表現を、という断り表現の使い分けが見られなかった。相手との距離に応じた断り表現の使い分けが見られないところに英語学習の影響が現われている。

L2 の影響を受けた日本語は日本語のバリエーションの一つである。日本語教育で日本語のバリエーションを扱うとき、男女差や地域差などを反映した日本語だけでなく、L2 の影響を受けた日本語にも関心を向ける必要性を提起したい。

キーワード：母語と L2 の間の影響の方向、断り、日本人大学生、英語に接触する頻度の違い、相手との距離に応じた断り表現の使い分け

0. はじめに

中間言語語用論 (interlanguage pragmatics) 研究の多くは、第二言語習得研究の一般的な傾向に倣い、母語と第二言語 (L2) の間の影響の方向は母語から L2 であるとし、L2 で発話行為を行う際の母語の語用知識の負の転移 (語用論的転移 (pragmatic transfer)) の有無を調査することに焦点を当ててきた。しかし、近年、母語と L2 の間には双方向の影響があると指摘する研究もある。音韻、意味、文法のレベルでは、音韻、意味、文法に関する先行研究に基づき、L2 の母語への影響を紹介している Cook (1992) が、その一例である。また、語用論レベルでは、英語もヘブライ語も堪能なイスラエルへのアメリカ人移民の依頼の発話行為を対象とした調査研究 (Blum-Kulka 1990) が、その一例である。

語用論レベルで L2 が母語に影響を与えるのか与えないのかを明らかにするには、母語しか知らない人の発話行為と母語と L2 を同じように操るバランスのとれたバイリンガルの発話行為を比較・分析する必要がある。しかし、今日、母語しか知らない人を見つけるのは難しいし、母語と L2 を同じように操るバランスのとれたバイリンガルも極めて数が少ない (Cook 1992、2006)。そこで、外国語学習の分野での L2 の母語への影響の検証は、L2 に接触する頻度の異なる 2 つのグループの発話行為の比較・分析として行われている。例えば、Cenoz (2003) は、スペイン人大学生が母語であるスペイン語で行った依頼の発話行為には、英語に接触する頻度の違いと英語の運用力の違いにより異なった傾向が見られることを報告している。

ある種のコミュニケーション行為は、本質的に、対話者のフェイス (face) に対する欲求を脅かすものとして働くと考えられる。それ故、話し手は、相手 (聞き手) または自分自身のフェイスを傷つける可能性をできるだけ少なくするために、適切な戦略を選択し、その戦略に合った言語表現を創り出すとされる。話し手がどんな戦略を選択するかは、話し手がそのフェイスを脅かす行為 (FTA) の大きさをどのように判断するかによる。FTA の大きさは、力関係 (P)、距離 (D)、メッセージの負担の度合 (R) という 3 要素の総和で決められる (Brown & Levinson 1987 (以下、B&L)) が、力関係、距離、メッセージの負担の度合は社会的文化的変数であるとされるので、選択される言語表現は文化によって異なる可能性がある。そのため、語用論レベルで母語に L2 の影響が見られるとするには、母語と文化的に大きく異なる L2 を学習している者を対象とした調査、依頼以外の発話行為を対象とした調査も必要である。

断るという発話行為は、FTA であると想定される。そこで、本研究は、日本語母語話者の母語での断りの発話行為に英語 (L2) 学習の影響が見られるかどうかを探る。英語に接触する頻度の異なる大学生 2 グループ (G1、G2) を調査対象とする。

断りに関してはいくつかの比較文化的 (cross-cultural) 研究が行われてきたが、主要な研究の 1 つは Beebe et al. (1990) であろう。Beebe et al. (前出) は、日本語を母語とする英語学習者の英語での断りに母語である日本語からの転移 (pragmatic transfer) が見られるかどうかを明らかにするための調査研究を行ったが、その調査の過程で、日本語母語話者の日本語での断りとアメリカ英語母語話者のアメリカ英語での断りを意味公式を用いて分析し、日本語での断りとアメリカ英語での断りの相違点を明らかにしている。Beebe et al. (前出) によれば、日本語での断りとアメリカ英語での断りの主要な相違点は、話し手の聞き手に対する力関係が断り表現の選択に関与するかどうかであるとされる。

本研究の目的は、英語学習が、語用論レベルで、日本語母語話者の母語に影響を与えるかどうかを探ることである。それ故、Beebe et al. (前出) で明らかにされた日本語での断りとアメリカ英語での断りの相違点を踏まえて、本研究のリサーチクエスチョンを以下のようにする。

英語に接触する頻度の異なる 2 つのグループ (G1、G2) の間には、

1. 断りが行われるそれぞれの場面で選択される断り表現に異なる傾向が見られるか。
2. 場面が変わったとき（例えば、断る相手との関係（力関係、距離）が変わったとき）、選択される断り表現に変化が見られるか。

1. 調査

1.1 調査対象者

英語に接触する頻度以外の個人的要因（年齢（20歳前後）、地域など）がほぼ同じ日本人大学生の2つのグループ（G1、G2）を調査対象とする。

G1とG2は、中学校、高等学校で学校教育を通して同じように英語を学んできたが、大学入学後、専攻の違いにより英語に接触する頻度が異なった大学生の2つのグループである。G1は幼児教育を専攻とする女子学生で、G2はアメリカ留学を目指して学ぶ英語集中課程の学生で、連日アメリカ人教員から英語で授業を受けており、英語の運用力は中級レベル（TOEFLなどによる）である。

なお、G2の学校のアメリカ人留学生とアメリカ人教員にアンケートとインタビューを行ってアメリカ英語での断りについて資料を集め、調査結果の解釈を補うものとする。

1.2 調査のデザイン

調査は、ポライトネス理論（B&L）の枠組みで、断り表現の選択に影響を与えると考えられる3つの変数を組み合わせでデザインした¹（例1参照）。聞き手の話し手に対する力関係（以下、力関係）は、上位・同等・下位の3水準、話し手と聞き手の距離（以下、距離）は、接触の頻度で捉えた親・疎の2水準、メッセージの負担の度合は、「自宅でのパーティーに招待されたこと（以下、招待）」と「新しくできたレストランに行ってみよう勧められたこと（以下、提案）」の2水準とした。結果として、断りの発話行為が行われる場面の変数の異なる12の場面が準備できた。なお、実際の調査では12の場面はランダムに提示した。

断り表現は多肢選択で求めた。断り表現の選択肢としては、藤森(1994)を踏まえ、{結論}、{弁明}、{代案}、{弁明+代案}という4つの意味公式に分類される言語表現を提示した。断るときには謝ることから話を始めることがあるが、謝るということは他のいずれの断り表現とも共起できる（森山1990）とされるので、英語学習が、語用論レベルで、学習者の母語に影響を与えるかどうかを探るといふ調査の目的を考えて、断り表現の選択肢は{詫び}に分類される言語表現を付加していないかたちとした。

語用論レベルでのL2の母語への影響を見るのに重要なのは、断りが行われる場面に応じた言語表現の選択が行われているかどうかである。本稿では、言語表現の選択は、断りが行われる場面の判断に基づいて行われると想定する（場面の判断と言語表現の選択に関しては、

杉戸 2007 に基づく)。それ故、回答者に断り表現を選択することを求めることに加え、断りが行われる場面をどのように判断するかも求めた。場面に関する判断は、招待あるいは提案されて話し手が感じる負担の度合（以下、負担の度合）と、招待あるいは提案を断られて聞き手が失望すると話し手が思う度合（以下、失望すると思う度合）から求めた。負担の度合と失望すると思う度合という2つの側面から場面に関する判断を求めたのは、「お互いのフェイスを維持することが、参加者全員の最大の利益になる」(B&L)とされるので、回答者は、話し手と聞き手、両者のフェイスに配慮して断り表現を選択すると考えたからである。

アンケート調査は2004年11月に行った。G1には40名の学生にアンケートを配布し40名から回収した（アンケートの回収率は、100%）。G2には26名の学生にアンケートを配布し22名（男女比は1：3）から回収した（アンケートの回収率は84.62%）。そこで、G1は40名の回答を、G2は22名の回答を分析する。なお、アンケート結果の解釈を補うために、2004年11月にアメリカ人教員（5名）と留学生（5名）に個別にインタビューを行った。また、留学生には、調査対象者に配布したアンケートの英語版を配布し、アメリカ英語で断る場合を想定して回答するよう求めた。

[例1] あなたの親しい友達が、その人の家で開かれるパーティーに招待してくれた。

質問1 どのように断りますか。日本語で話しているとしたら、あなたが、一番よく使うと思う返答を(A)～(D)から、選んでください。

(A) 招待を直接断る。

例えば：「行けません。」

(B) 言い訳をして、招待を断る。

例えば：「忙しいので、行けません。」

(C) 招待を断るが、代案を示す。

例えば：「その日は行けません。〇〇でいいなら、行きたいのですけど。」

(D) 言い訳をして招待を断るが、代案を示す。

例えば：「忙しいので、その日は行けません。

〇〇でいいなら、行きたいのですけど。」

質問2 招待されたとき：

* この状況は、あなたにとってどのくらいやっかいなものですか。

下から選んでください。

5. とてもやっかいである 4. すこしやっかいである 3. どちらとも言えない
2. ほとんどやっかいでない 1. すこしもやっかいでない

* あなたが断ったら、招待した人は、どのくらいがっかりすると思いますか。

下から選んでください。

5. とてもがっかりする 4. すこしがっかりする 3. どちらとも言えない
2. ほとんどがっかりしない 1. すこしもがっかりしない

2. 調査結果

2.1 分析の基準

本節では、第0節でたてた本研究のリサーチクエスチョンを分析する。分析の基準は以下のようにする。[例1]で断り表現の選択肢として提示した表現のうち、(A)は{結論}に分類される直接断り表現であり、(B)、(C)、(D)は、それぞれ{弁明}、{代案}、{弁明+代案}に分類される間接断り表現である。本研究では、直接断り表現より、間接断り表現の方が丁寧度が高いとする。そして、藤森(1994)を踏まえて、断り表現の丁寧度は言語表現の長さに現れると想定し、間接断り表現のなかでは、{弁明}あるいは{代案}に分類される言語表現よりも{弁明+代案}に分類される言語表現のほうが丁寧度が高いとする。

2.2 アンケート結果

2.2.1 それぞれの場面で選択される断り表現

リサーチクエスチョン1は、G1とG2の間には、断りが行われるそれぞれの場面で選択される断り表現に異なる傾向が見られるか、である。そこで、断りが行われる場面ごとに、選択された断り表現とその表現を選択した回答者数を表1～表4に示す。なお、断り表現は意味公式を用いて表記してある。Fisherの直接確率法を用いて解析した結果、ほとんどの場面で有意な差は見られなかった。このことは、断りが行われるそれぞれの場面でのG1とG2の断り表現の選択の仕方は、概ね、同じであることを意味する。ただし、上位・疎の相手に招待を断る場面と同等・疎の相手に招待を断る場面において、それぞれ $P=0.027$ 、 $P=0.046$ で有意であった。このことは、これら二つの場面では、G1の選択した断り表現とG2の選択した断り表現の比率のどこかに有意な差があることを意味する(表2を参照)。

表1 選択された断り表現—親の相手に招待を断る場合— (G1: n=40、G2: n=22)

	上位		同等		下位	
	G1	G2	G1	G2	G1	G2
結論	8(20.00)	6(27.27)	7(17.50)	5(22.72)	9(22.50)	5(22.72)
弁明	12(30.00)	3(13.64)	11(27.50)	7(31.82)	15(37.50)	6(27.27)
代案	4(10.00)	3(13.64)	8(20.00)	2(9.09)	7(17.50)	5(22.72)
弁明+代案	16(40.00)	10(45.45)	14(35.00)	8(36.36)	9(22.50)	6(27.27)

注) () 内は%。

表2 選択された断り表現—疎の相手に招待を断る場合— (G1: n=40、G2: n=22)

	上位*		同等*		下位	
	G1	G2	G1	G2	G1	G2
結論	15(37.50)	6(27.27)	10(25.00)	6(27.27)	16(40.00)	9(40.91)
弁明	13(32.50)	6(27.27)	11(27.50)	12(54.55)	15(37.50)	6(27.27)
代案	6(15.00)	0(0.00)	9(22.50)	0(0.00)	3(7.50)	4(18.18)
弁明+代案	6(15.00)	10(45.45)	10(25.00)	4(18.18)	6(15.00)	3(13.64)

注) () 内は%、* は0.05水準で有意であることを示す。

表3 選択された断り表現—親の相手に提案を断る場合— (G1: n=40、G2: n=22)

	上位		同等		下位	
	G1	G2	G1	G2	G1	G2
結論	7(17.50)	5(22.73)	3(7.50)	3(13.64)	9(22.50)	9(40.91)
弁明	10(25.00)	3(13.64)	9(22.50)	6(27.27)	10(25.00)	8(36.36)
代案	8(20.00)	3(13.64)	15(37.50)	2(9.09)	10(25.00)	1(4.55)
弁明+代案	15(37.50)	11(50.00)	13(32.50)	11(50.00)	11(27.50)	4(18.18)

注) () 内は%。

表4 選択された断り表現—疎の相手に提案を断る場合— (G1: n=40、G2: n=22)

	上位		同等		下位	
	G1	G2	G1	G2	G1	G2
結論	16(40.00)	6(27.27)	10(25.00)	6(27.27)	19(47.50)	11(50.00)
弁明	11(27.50)	7(31.82)	10(25.00)	6(27.27)	12(30.00)	5(22.73)
代案	6(15.00)	3(13.64)	12(30.00)	2(9.09)	4(10.00)	1(4.55)
弁明+代案	7(17.50)	6(27.27)	8(20.00)	8(36.36)	5(12.50)	5(22.73)

注) () 内は%。

2.2.2 相手との関係の変化に伴う断り表現選択の変化

リサーチクエスチョン2は、場面が変わったとき（例えば、断る相手との関係（力関係、距離）が変わったとき）、選択される断り表現に変化が見られるか、である。そこで、回答者一人一人が選択した断り表現が相手との関係が変わる前と変わった後で異なっているかどうかを調べた。断り表現の選択肢として提示した4つの断り表現の間の大きな違いは、直接断り表現か間接断り表現かの違いである。そこで、相手との関係が変わったとき選択された表現に見られる変化は、「直接断り表現→間接断り表現」あるいは「間接断り表現→直接断り表現」

現」とし、「直接断り表現→間接断り表現」とした回答者数と「間接断り表現→直接断り表現」とした回答者数に食い違いがでるかどうかを、McNemar 検定を用いて解析した（断り表現の選択肢として提示した言語表現のうち、どの表現が直接断り表現でどの表現が間接断り表現であるかに関しては、2.1 を参照）。解析の結果、有意な差が生じた場面を図1～図6に示す。

図1 招待の断りの場合 G1

疎→親への変化（下位の場合）

	親の相手	
	直接断り	間接断り
疎の相手		
直接断り	8	8
間接断り	1	23

P=0.039

図2 提案の断りの場合 G1

下位→同等への変化（疎の場合）

	同等の相手	
	直接断り	間接断り
下位の相手		
直接断り	6	13
間接断り	4	17

P=0.049

図3 提案の断りの場合 G1

疎→親への変化（上位の場合）

	親の相手	
	直接断り	間接断り
疎の相手		
直接断り	6	10
間接断り	1	23

P=0.012

図4 提案の断りの場合 G1

疎→親への変化（同等の場合）

	親の相手	
	直接断り	間接断り
疎の相手		
直接断り	2	8
間接断り	1	29

P=0.039

図5 提案の断りの場合 G1

疎→親への変化（下位の場合）

	親の相手	
	直接断り	間接断り
疎の相手		
直接断り	7	12
間接断り	2	19

P=0.013

図6 提案の断りの場合 G2

下位→同等への変化（親の場合）

	同等の相手	
	直接断り	間接断り
下位の相手		
直接断り	3	6
間接断り	0	13

P=0.031

図1からわかるように、G1は、下位の相手からの招待を断る場合、断る相手との関係（距離）が「疎→親」に変わったとき、「直接断り表現→間接断り表現」へと選択する表現を変化させた回答者数は8、「間接断り表現→直接断り表現」へと選択する表現を変化させた回答者数は1で、McNemarの検定の結果、 $P=0.039$ である。このことは、下位の相手からの招待を断る場合、断る相手との関係（距離）が「疎→親」に変わったとき、「直接断り表現→間接断り表現」へと断り表現の丁寧度を変化させる回答者が有意に多いことを示唆する。同様にして、図2は、疎の相手からの提案を断る場合、断る相手との関係（力関係）が「下位→同等」に変わったとき、「直接断り表現→間接断り表現」へと断り表現の丁寧度を変化させる回答者が有意に多いことを示唆する。図3、図4、図5は、それぞれ、上位の相手/同等の相手/下位の相手からの提案を断る場合、断る相手との関係（距離）が「疎→親」に変わったとき、「直接断り表現→間接断り表現」へと断り表現の丁寧度を変化させる回答者が有意に多いことを示唆する。一方、G2は、親の相手からの提案を断る場合、相手との関係（力関係）が「下位→同等」に変わったとき、「直接断り表現→間接断り表現」へと断り表現の丁寧度を変化させる回答者が有意に多かった（図6）が、相手との距離が変わっても断り表現の丁寧度を変化させることはなかった。

それでは、相手との関係（力関係、距離）が変わったとき、選択する断り表現を「直接断り表現→間接断り表現」へと変化させた回答者には、間接断り表現の中で、どれか特定の表現を選択する傾向が見られるだろうか。相手との関係の変化に応じて選択された間接断り表現の内訳とその間接断り表現を選択した回答者数を表5に示す。なお、選択された言語表現は意味公式を用いて表示してある。

表5 人間関係が変わった結果、選択された間接断り表現の内訳

	G1(n=40)					G2(n=22)
	招待の断り	提案の断り				提案の断り
	疎→親 下位の場合 (図1)	下位→同等 疎の場合 (図2)	疎→親 上位の場合 (図3)	疎→親 同等の場合 (図4)	疎→親 下位の場合 (図5)	下位→同等 親の場合 (図6)
弁明	2(25.00)	5(38.46)	1(10.00)	2(25.00)	5(41.67)	1(16.67)
代案	2(25.00)	6(46.15)	3(30.00)	4(50.00)	4(33.33)	1(16.67)
弁明+代案	4(50.00)	2(15.38)	6(60.00)	2(25.00)	3(25.00)	4(66.67)
合計	8(100.00)	13(99.99)	10(100.00)	8(100.00)	12(100.00)	6(100.01)

注) ()内は%。例えば、「疎→親 下位の場合 (図1)」は、下位の相手に断る場合で相手との距離が「疎→親」へと変化したときで、図1で示した場合に対応する。

表5は、特にG1の場合には、断りが行われるどれか特定の場面で、{弁明}、{代案}、{弁明

+代案}に分類される言語表現のうち、どれか特定の表現が好んで選択される傾向が見られるとは言いがたいことを示唆している。

次に、参考資料として、留学生のアメリカ英語での断りに関するアンケート結果を表6、表7に示す。なお、選択された言語表現は意味公式を用いて表示してある。断りが行われる12の場面で選択された断り表現をFisherの直接確率法を用いて解析した結果、調査対象者が6人と人数が少なかったが、招待の断りでも提案の断りでも有意な差は見られなかった。また、{結論}に分類される直接断り表現を選択した回答は見られなかった。

表6 アメリカ英語での招待の断り—留学生の場合— (n=6)

	上位・親	上位・疎	同等・親	同等・疎	下位・親	下位・疎
結論	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)
弁明	3(50.00)	3(50.00)	5(83.33)	4(66.67)	3(50.00)	3(50.00)
代案	0(0.00)	1(16.67)	0(0.00)	1(16.67)	2(33.33)	2(33.33)
弁明+代案	3(50.00)	2(33.33)	1(16.67)	1(16.67)	1(16.67)	1(16.67)

注) () 内は%。例えば、「上位・親」は上位・親の相手に断る場合。

表7 アメリカ英語での提案の断り—留学生の場合— (n=6)

	上位・親	上位・疎	同等・親	同等・疎	下位・親	下位・疎
結論	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)	0(0.00)
弁明	1(16.67)	2(33.33)	2(33.33)	3(50.00)	3(50.00)	4(66.67)
代案	1(16.67)	2(33.33)	1(16.67)	1(16.67)	1(16.67)	1(16.67)
弁明+代案	4(66.67)	2(33.33)	3(50.00)	2(33.33)	2(33.33)	1(16.67)

注) () 内は%。例えば、「上位・親」は上位・親の相手に断る場合。

3. 考察

第2節から、G1とG2の間には、それぞれの場面で選択された断り表現には概ね同じような傾向が見られたが、断る相手との関係が変わったとき、選択する断り表現を変化させるかどうかに関しては、明確な相違が見られることが明らかになった。G1とG2の相違は、相手との関係を距離から捉えたときに明確に見られた。提示した12の場面は距離から捉えると6つの場面になるが、G1には、その6つの場面のうち4つの場面で、相手との距離が「疎→親」へと変わるとき、選択する断り表現を「直接断り表現→間接断り表現」へと断り表現の丁寧度を変化させる回答者が有意に多かった(図1、図3、図4、図5を参照)。一方、G2には相手との距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させるという現象は見られなかった。

それでは、相手との関係が変わったとき、G1、G2 はどのようにして断り表現を選択していたのであろうか。

本調査では、言語表現の選択は断りが行われる場面の判断に基づいて行われると想定し、回答者に、招待あるいは提案されて話し手が感じる負担の度合（以下、負担の度合）と、招待あるいは提案を断られて聞き手が失望すると話し手が思う度合（以下、失望すると思う度合）から断りが行われる場面の判断を求めた（1.2を参照）。相手との距離が「疎→親」へと変化したとき、断り表現の丁寧度を変化させた G1 の回答者のうち、相手との距離の変化に伴い、断りが行われる場面の判断を変化させた回答者の割合をパーセントで表8に示す。

表8 相手との距離が「疎→親」へと変化したことに伴い、
場面の判断を変化させた回答者の割合—G1の場合—

	招待の断り	提案の断り		
	疎→親 下位の場合 (図1)	疎→親 上位の場合 (図3)	疎→親 同等の場合 (図4)	疎→親 下位の場合 (図5)
負担の度合 の変化	75%	50%	38%	58%
失望すると思う 度合の変化	50%	50%	38%	33%

注) 例えば、「疎→親 下位の場合 (図1)」は、下位の相手に断る場合で相手との距離が「疎→親」へと変化したときで、図1で示した場合に対応する。

表8から、招待の断りでは、相手との距離が「疎→親」と変化するとき、負担の度合が変化すると判断した回答者が75%に達していることがわかる。ここから、話し手は、断りが行われる場面の判断を一つの手がかりとして、断り表現の選択を行っていると推測される。しかし、提案の断りでは、相手との距離が「疎→親」と変化するとき、負担の度合あるいは失望すると思う度合が変化すると判断した回答者はせいぜい半数にすぎない。このことは、提案の断りでは、回答者は負担の度合あるいは失望すると思う度合から行った場面の判断を基に断り表現を選択しているのではないことを示唆する。それでは、回答者は、なぜ、距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させたのであろうか。

井出(2006:101-106)は、日本人とアメリカ人の敬語行動の比較研究プロジェクトにおいて、それぞれの国の大学生にアンケート調査を行い、ペンを借りるときに使うと思われる依頼表現を比較している。そして、日本人の場合は、ソトの人物カテゴリーといわれる人々(教授、医者、アルバイトの上司など)に使われる依頼表現には例外なく「です・ます」がある(例えば、「お借りしてもよろしいでしょうか」、「貸してくれませんか」)が、ウチの人間として認識する人々(アルバイト仲間、親友、兄、妹など)に使われる依頼表現には「です・

ます」が全くついていない（例えば、「使ってもいい」、「貸してよ」）というように、使われる表現、人物の相関がはっきりしていることを明らかにしている。しかし、最も丁寧な表現（例えば、「お借りしてもよろしいでしょうか」）は最も心的距離を大きくとるべき人物カテゴリー「教授」に使う、というような一対一の相関関係は得られなかったという。この調査結果を基に、井出（前出）は、日本人の敬語行動には次のような本質があるとする。すなわち、「日本人は相手をウチに属するかソトに属するか、そしてそれに応じて『です・ます』を使うか使わないか、その境界線をはっきり分けるということだけをはっきりと認識して言葉の使い分けをしている。ちなみに、『使い分け』という意味は、表現も人物も二つのカテゴリーに分けて使うことである」（井出 2006:105）。一方、アメリカ人の場合は、だれにでも使える表現がかなりあり、アメリカ人は自分の意思で一つ一つの表現を選んで使っているという。

本調査の提案の断りに見られる G1 の断り表現の選択の仕方は、井出（前出）から説明できる。G1 は、相手との距離の変化（「疎→親」）に応じて、断り表現の丁寧度を「直接断り表現→間接断り表現」へと変化させているが、ある特定の場面で、間接断り表現（{弁明}、{代案}、{弁明+代案} に分類される言語表現）のなかでどれか特定の言語表現を好んで選択しているわけではないからである（表 5 を参照）。つまり、G1 の提案の断りでの断り表現の選択の仕方には、相手を距離によって「疎」に属するか「親」に属するか二つに分け、それに応じて表現も直接断り表現を使うか間接断り表現を使うかという「大まかだが、境界線のはっきりした区別」（井出 2006:106）が見られるからである。なお、G1 には、丁寧度の高い間接断り表現を「親」の相手に対して選択した回答者が有意に多かったのは、断るという行為は相手を怒らせるリスク（risk）が大きいとされる（Beebe et al. 前出）ので、「親」の相手との関係を重視したためであると推測される。ただし、招待の断りでは、距離が「疎→親」へと変化したとき断り表現の丁寧度が変化したのは、下位の相手に断る場合のみで、上位の相手と同等の相手に断る場合は断り表現の丁寧度の変化は見られない。

断りという同じ発話行為で、しかも、同じ回答者が、招待の断りと提案の断りで断り表現を選択するよりどころとしたものが異なっているという本調査結果は、井出（前出）の言う日本人の敬語行動の本質からは説明できないことが日本人の言語使用にあることを示唆している。

本調査結果から、G1 では、招待を断るという行為と、提案を断るという行為は、共に、「断る」という行為であるが、両者は異なるものとして捉えられている可能性がある。それは、「断る」という行為の前提となる「招待する」という行為と「提案する」という行為の違いに起因するものと推測されるが、この点の解明は次なる課題とする。（なお、G1 の提案の断りでは、疎の相手に断る場合、相手との力関係が「下位→同等」と変化するときも、選択する断り表現を「直接断り表現→間接断り表現」へと変化させる回答者が有意に多かった（図 2 を参照）。その場合も負担の度合あるいは失望すると思う度合が変化すると判断した回答者はせいぜい半数にすぎない（負担の度合：54%、失望すると思う度合：15%）。）

相手との距離の変化に応じて選択する断り表現の丁寧度の変化が見られない G2 は、どのようにして断り表現を選択しているのであろうか。G2 が日々インターアクションを行っているアメリカ人留学生のアメリカ英語での断りには、調査対象とした留学生の数が 6 名と数が少ないとはいうものの、提示した 12 の場面で選択された断り表現の比率の間に有意な差は見られなかった (表 6、表 7 を参照)。このことは、断り表現の選択に影響を与えるとされる 3 つの変数、力関係、距離、メッセージの負担の度合 (B&J) の異なる 12 の場面での断り表現の選択の仕方に明確な相違が見られなかったことを意味する。このことはどのように解釈したらいいのだろうか。アメリカ人教員とアメリカ人留学生にインタビューを行った結果、よく知っている相手だからこのように断る、知らない相手だからあのように断るというように、相手との距離に応じて決まった断り方をするのではなく、断りが行われる場面がどのような場面であるかを考えて、一つ一つの場面での断り方を決めていたことがわかった。また、アメリカ英語母語話者の英語での断りに、直接断り表現あるいは間接断り表現のどちらを使うかということに相手との力関係の影響が見られないことは、例えば、Beebe et al. (前出)、Nelson et al. (2002:178) でも指摘されている。以上のことから、アメリカ英語では、井出 (前出) が指摘するように、どの場面でも使われる幾つかの断り表現があり、その表現のなかから、話し手は、話し手個人の意味により、断りが行われるそれぞれの場面で話し手が適切だと考える表現を選択していると言えよう。言い換えるならば、話し手は、一つ一つの場面で、力関係、距離、負担の度合を集計してフェイスが脅かされる度合 (FTA の度合) を判断し、その判断を基に適切なストラテジーを選択し、そのストラテジーに合った言語表現を創り出している (B&L) と言えよう。

本調査対象とした G2 は、アメリカ人留学生やアメリカ人教員と個人的な友好関係を構築しようと日々英語でコミュニケーションを図っている。学習言語である英語でコミュニケーションを成立させるには、母語話者と全く同じようにその言語を運用しなければならないということではないが、相手との人間関係を含めた「状況」を理解し、学習言語社会でその「状況」に適切とされる言語表現を使用することが必要である。そのためには、母語である日本語の状況認知の仕方、言語表現の選択の仕方を学習言語である英語での状況認知の仕方、言語表現の選択の仕方に置き換えるのではなく、「母語と異言語を結ぶ共通の倫理を構築する」(細川 2000:19) ことが必要であるとされる。(以上、学習言語でコミュニケーションを成立させるための「状況」認知の仕方と言語表現の選択に関しては、細川 2000:19 に基づく。)

Cenoz (2003) は、英語に接触する頻度が高く、英語が堪能なスペイン人英語学習者が母語であるスペイン語で行った依頼の発話行為と学習言語である英語で行った依頼の発話行為に相違が見られないこと、英語に接触する頻度が高く、英語が堪能なスペイン人のスペイン語での依頼の発話行為と英語に接触する頻度が低く、英語の運用力の劣るスペイン人のスペイン語での依頼の発話行為には相違が見られること、英語に接触する頻度が高く、英語が堪能なスペイン人の英語での依頼の発話行為は、英語母語話者の英語での依頼の発話行為とは異なること、を報告している。

G2の選択した断り表現には、断りが行われるそれぞれの場面での断り表現の選択の仕方に関しては、アメリカ人留学生やアメリカ人教員とは異なり、G1と同じように直接断り表現も選択されている。しかし、相手との距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を使い分けるかどうかという点に関しては、G1とは異なり、アメリカ人留学生やアメリカ人教員と同じように相手との距離に応じた断り表現の丁寧度の使い分けは見られない。言い換えるならば、G2の選択した断り表現には、G1の断り表現の選択の仕方に見られる特徴とアメリカ人留学生やアメリカ人教員の断り表現の選択の仕方に見られる特徴が混在している。これらのG2の選択した断り表現に見られる特徴を、細川（前出）とCenoz（前出）を踏まえて考えると、G2が日々アメリカ人留学生やアメリカ人教員と学習言語である英語でコミュニケーションを図ろうとする過程で、相手との人間関係を含めた「状況」に適切な言語表現を選択する仕方に関して、「母語と異言語を結ぶ共通の倫理」（細川 2000:19）が構築されたのではないかと推測される。その結果、G2の選択した断り表現に見られるように、母語である日本語で断る場合でも、距離から「疎」と捉えた相手には直接断り表現を、「親」と捉えた相手には間接断り表現をとるように、相手との距離に応じて断り表現の丁寧度を使い分けるというやり方が行われなくなったのではないかと推測される。相手との距離に応じた断り表現の丁寧度の使い分けが見られなくなったというところに、英語学習の影響が現われていると解釈される。

なお、相手との力関係の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させるという現象は、G1にもG2にも、提案の断りで力関係が「下位→同等」と変化した場合以外では見られなかった（図2、図6を参照）。それは、本調査対象としたG1とG2が大学生であるということに起因するのであろうか。この点を解明するには更なる調査が必要である。

4. まとめと今後の展望

本研究は、母語と文化的に大きく異なる言語を学習している学習者の母語にも、語用論レベルで、学習言語（L2）の影響が見られるかどうかを探ることを試みた。語用論レベルでL2の母語への影響の有無を調べるには、母語だけしか知らない日本語母語話者の言語使用と日本語と英語を同じように話す日本語母語話者の言語使用を比較する必要があるが、今日の日本では、ある年齢以下の日本人は学校教育を通して英語を学んでいるので、日本語だけしか知らない日本人を見つけることは困難であるし、母語と英語を同じように話すバイリンガルも数が少ない（Cook 2006:142）。そこで、本研究では、外国語学習の分野でのL2の母語への影響を検証した先行研究（例えば、Cenoz 2003）に倣い、大学入学後専攻の違いから英語に接触する頻度の異なる日本人大学生の2つのグループの断りの発話行為を調査した。調査はポライトネス理論の枠組みでデザインし、多肢選択で必要なデータを収集した。データを分析した結果、英語に接触する頻度の異なる2つのグループには、断りの発話行為が行われるそれぞれの場面での断り表現の選択の仕方には、概ね、同じような傾向が見られた。しかし、

断る相手との距離が変わるとき、選択する断り表現の丁寧度を変化させるかどうかという点に関しては、2つのグループの間に相違が明確に見られた。英語に接触する頻度の低いグループ（G1）には、断る相手との距離の変化に応じて選択する断り表現の丁寧度を変化させる傾向が見られたが、英語に接触する頻度の高いグループ（G2）には、相手との距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させる傾向は見られなかった。英語に接触する頻度の高いグループが日々インターアクションを行っているアメリカ人留学生へのアンケート、アメリカ人留学生やアメリカ人教員へのインタビュー、及び、アメリカ英語での断りの発話行為に関する先行研究を基に、英語に接触する頻度の高いグループのアンケート結果を解釈すると、英語に接触する頻度の高いグループの選択した断り表現には、断る相手との距離の変化に応じて断り表現の丁寧度を変化させる傾向が見られないという点に、学習言語であるアメリカ英語での断り方の影響が窺える。

断りは、他の発話行為と同じように、基本的な文化的価値（fundamental cultural values）を反映している（Beebe et al.前出）。英語学習が一因となり、そして英語学習を通して英語文化に触れることが一因となり、英語に接触する頻度の高いグループのポライトネスに応じた言語行動の捉え方に変容が生じたと解釈できる。

本調査は、一地方の大学生の断りの発話行為という一つの発話行為を対象としたものであり、調査対象者の数も少ない。必要なデータは多肢選択を用いて収集したが、多肢選択で収集したデータは、実際の場面での日本人の言語使用とは必ずしも同じではない。また、多肢選択で断り表現の選択肢として提示した言語表現は、大学生の多様な言語使用を考慮して、「です・ます」を用いた丁寧な表現を提示したが、よく知っている相手に丁寧な表現を日常的に使っていない回答者には表現を選択する際になんらかの影響を与えたかもしれない。以上のことから、本調査は、一地方の大学生を対象とした事例研究であり、結果を一般化することはできない。

しかし、本調査から、本調査の範囲内でのことではあるが、語用論レベルで、日本語母語話者の母語にもL2の影響が見られることが明らかになった。L2の影響を受けた日本語は日本語のバリエーションの一つである。国の内外で外国語を学習している日本人が増加している今日、日本語教育で日本語のバリエーションを扱うとき、性差や世代差、地域差などを反映した日本語だけでなく、L2の影響を受けた日本語にも関心を向ける必要性を提起したい。

注

1. 筆者は、日本語とアメリカ英語での断り表現の選択の仕方に関する一連の調査を行った。本稿で報告している調査は、その調査の一部である。

参考文献

- (1) Beebe, L. M., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990) "Pragmatic Transfer in ESL Refusals." *On the Development of Communicative Competence in a Second Language*. Eds. Scacella, R.C., Andersen, E. S., & Krashen, S.D.. New York: Newbury House.55-73.
- (2) Blum-Kulka, S. (1990) "You don't touch lettuce with your fingers: Parental politeness in family discourse." *Journal of Pragmatics* 14, 259-89.
- (3) Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- (4) Cenoz, J. (2003) "The Intercultural Style Hypothesis: L1 and L2 Interaction in Requesting Behaviour." *Second Language Acquisition 3. Effects of the Second Language on the First*. Ed. Cook, V.. 62-80.
- (5) Cook, V. (1992) "Evidence for multi-competence." *Language Learning* 42, 557-591.
- (6) Cook, V., Bassetti, B., Kasai C., Sasaki M., Takahashi, J. A. (2006) "Do bilinguals have different concepts? The case of shape and material in Japanese L2 users of English." *International Journal of Bilingualism* vol. 10 no. 2, 137-152.
- (7) Nelson, L. G., Carson, J., Batal, A. M., Bakary, E. W. (2002) "Cross-Cultural Pragmatics: Strategy Use in Egyptian Arabic and American English Refusals." *Applied Linguistics* vol.2, no.2, 163-189.
- (8) 井出祥子(2006)『わきまへの語用論』大修館書店.
- (9) 杉戸清樹(2007)「日本語社会における言語行動のバリエーションと日本語教育」『日本語教育』134:18-27.
- (10) 藤森弘子(1994)「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファー—『断り』行為の場合—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1: 1-19.
- (11) 細川英雄(2000)「崩壊する『日本事情』—ことばと文化の統合をめざして—」『21世紀の「日本事情」—日本語教育から文化リテラシーへ』第2号: 16-27.
- (12) 森山卓郎(1990)「『断り』の方略—対人関係調整とコミュニケーション」『言語』19-8: 59-66.